

# マリアとは誰なのか

榎 田 絢 子

## はじめに

もう15年も前になるであろうか、パウロ6世の『マリァリス・クルトゥス』を若い人たちと共に読んだ時、私のこころに残った一つの言葉、それは「主の謙遜なはしための承諾によって人類が神にたちかえてゆくことができるようになった」<sup>(1)</sup>、という言葉である。以来、マリアとは誰かを問いつつ、心に刻まれたこの言葉の意味するものを何度も祈るよう促された。

2007年、私の属する聖マリア修道女会は創立400年を記念する。今年、サバティカル・イヤーをいただき、ビザンチン典礼のマリア巡礼をしたこともあり、「マリアとは誰なのか」というテーマで、今までの研究を振り返りまとめてみたい。

資料としたものは、キリスト教の聖典である聖書、教会の歴史をしるす公文書、典礼関係を中心に先行資料を参考にして考察していく。

## 聖書に見るマリア

聖書全体から見て、マリアが描かれる箇所は決して量的に多いとはいえない。しかし、創世記から黙示録に至るまで、救いの歴史に協力する女性の姿として、また、救い主の母であり、協力者であるマリアについて直接あるいは間接的に言及されていると解釈できる。

## 旧約聖書

旧約聖書を忠実に読んで行く時、そこには神の人類への哀れみによる

救いの歴史が、「預言者たちによって、多くのかたちで、多くの仕方  
先祖に語られ」（ヘブライ人への手紙1・1）ている。同時に、それに寄  
り添うように救いの歴史に関わる女性で表わされる表象が散見する。そ  
の主なものを取り上げてみる。

### 救いの約束における「女」

まず創世記に、初めの人間としてのアダムとエヴァが描かれ、エヴァ  
によって傷つけられた人類のあがないの予告が、「お前と女、おまえの  
子孫と女の子孫の間に私は敵意をおく。彼はお前の頭を砕き、お前は彼  
のかかとを砕く。」（3・15）として登場する。

ここでの「女」はエヴァだけでなく、将来の救世におけるキリストの  
母マリアをも指し、「原始福音」といわれている<sup>(1)</sup>。

### 不思議な誕生における「母」

<sup>うまがめ</sup> 妬の出産が聖書には複数描かれている。

・サラへの告知：選ばれた民の先祖アブラハムには子がなかった。夫  
婦とも老齢化して子を儲ける希望がなくなったとき、天使から子の誕生  
が告げられる。そして、約束の民が誕生していくことが創世記15章1  
～21、17章1～8、18章1～15、21章1～8、22章1～19に描かれ  
る。

・士師サムソンの誕生：イスラエルが約束の地で部族ごとに定住して  
いく中で、40年にわたってペリシテ人に苦しめられる様子が士師記に  
描かれる。その苦境を救うため、彼らに偉大な士師サムソンが与えら  
れるが、その誕生は不妊の女からの誕生である。「あなたは不妊の女で  
子を産んだことがない、だが、身ごもって男の子を生むであろう。……  
その子は胎内にいるときからナヅル人として神に捧げられている……彼  
は、ペリシテ人の手からイスラエルを解き放つ先駆者となろう」（13・3  
～5）。

・ハンナの祈りに応えられる主：ハンナは子ができないことを苦にして祈っていたとき、祭司エリから祈りの成就を約束され、先見者（1サムエル9・9参照）サムエルを生む（同、1・1～20）。サムエル誕生の喜びで神を賛美するハンナの祈り（同、2・1～10）は、マリアのマグニフィカトの下敷きとなっている。

・おとめからの子の誕生：<sup>うますめ</sup> 妬 からの奇跡的誕生に加え、聖書はおとめからの誕生をも預言する。「見よ、おとめがみごもって男の子を生み、その名をインマヌエルと呼ぶ」（イザヤ7・14）。聖書学的研究からこの箇所のおとめ（ヘブライ語アルマー）は「処女」、又は単に「若い女」の意味であるが、70人訳聖書は処女ととりギリシャ語のバルテノスと訳した。そこから救い主のおとめからの誕生の預言とされ、マタイ福音書はこの預言の成就を述べる。

これらの箇所はマリアのイエス誕生を少しずつ準備しているといえる。

### 「シオンの娘」

シオンはエルサレムの東にある丘の名前であるが、古くからエルサレムと同義であった。神から選ばれたシオン・エルサレムはそこに神殿があり、神が現存する場所であるため聖なる町、神に属する町とされ、巡礼者が集まる精神的・宗教的中心であった。同時にイスラエルの墮落の時にも「シオンの娘」の名でその姿が描写される。こうしてシオン・エルサレムは最終的には人格化されて、神の民、教会のシンボルとなる。教会はシオンの娘として神の花嫁、契約による神の配偶者、信じる者たちの母なのである<sup>(2)</sup>。「主はシオンを選びそこに住むことを定められた」（詩篇132・13）。そして救いを待ち望む民に主は言われる。「娘シオンに言え、見よ、あなたの救いがやってくる。……そして人は彼らを神の聖なる民、主の贖われた者たちと呼ぶ」（イザヤ62・11～12）。しかも主はシオンのただ中にいる。「娘シオンよ、喜びの声を上げよ。イ

スラエルよ、歓呼の声を上げよ……お前の主なる神は、お前の中におられ、救いをもたらす勇士」(ゼフォニア 3・14～20)、「娘シオンよ、声をあげて喜べ。私は来てあなたのただ中に住まう」(ゼカリヤ 2・14)、と。

ここで、娘シオンは新しい契約における救いを待つ女性と同一視されている。

### その他、知恵文学にみる「女性」

知恵の書、ベン・シラの書では、知恵が愛する女性となり、格言の書では賢明な妻として描かれている。有名な雅歌が描く女性は、ご自分の民への神の熱い思いであり、人間の心底にある神への憧憬である。

石川康輔師は『旧約聖書続編』にみられる女性像の中で、「続編」の女性像を、神と緊密な結びつきを持つ『男性をも含む真の人間像』、真の人間を示す『人物像』である<sup>(3)</sup>としている。

以上旧約聖書を辿りながら、次のようなたとえで旧約聖書にみられるマリアを説明されたことを思い出した<sup>(4)</sup>。

登山の時、思いがけず出くわす湧き水がある。その一つ一つは小さなものであるが、ある所で轟々と響きながら流れる川になることがよくある。マリアは聖書の中でこのように現れる。聖書に表れた、小さな預言、一人の婦人、都市の名として、少しずつこの婦人が誰であるか、その性格や在り様が示されていき、新約聖書でマリアという名の大きな川となって見えてくる。

このたとえばは聖書を誠実に読むヒントとなっている。

### 新約聖書

新約聖書の中に直接描かれるマリアを取り上げてみる。主に、ここでマリアは「イエスの母」と呼ばれている。

## 誕生・幼年物語

・ルカ福音書に、マリアへの天使によるイエス誕生の予告（1・26～38）が描かれている。「おめでとう。恵まれた方。主があなたと共におられる。」「あなたは身ごもって男の子を生む」、「その子は偉大な人となり、いと高き方の子と言われる」。当時14、5才だったといわれる乙女が、自分の身に起こることに驚き、率直に「どうして、そのようなことがありえましょうか」と問いただし、「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身になりますように。」と応えて、神の言葉に同意している。

これを、パウロ6世は「神と人間との間に交わされた、救いにまつわる対話の中に見られる一つの頂点」<sup>(5)</sup>である、と言っている。

・マタイ福音書（1・18～25）では、イエスの誕生を神から夫ヨゼフへの答えとして描いている。「ダビデの子ヨゼフ、恐れずに妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を生む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである」。前述した旧約聖書でなされた預言の成就として、ヨゼフの側から、ダビデの子孫としてのイエスの誕生を描いている

・お告げを受けたマリアの心は、不妊だった親族のエリザベト訪問をきっかけに、その喜びが表現されている（ルカ1・39～56）。共に神の恵みを受け、人間知が及ばないことを共鳴して理解するエリザベトの言葉に、マリアは神をたたえ賛美して歌う。「私の魂は主をあがめ、私の霊は救い主である神を喜びたたえます……力ある方が私に偉大なことをなさいました……いつの世の人もわたしを幸いな者というでしょう」。自分のことだけでなく、「主は……思い上がる者を打ち散らし、権力のある者をその座から引き降ろし」と、当時のイスラエルが置かれていた苦しみへの神の答えを読みとり、「祖先におっしゃったとおり、その僕

イスラエルを受け入れ、憐れみをお忘れになりません」と、自分の民への神の誠実を感謝して歌っている。現代にも通じる内容をもつマリアの賛歌である。

- ・ルカ福音書には、クリスマス劇で有名な誕生場面がある（2・1～20）。「民全体に与えられる大きな喜びを告げ知ら」された羊飼いたちが「マリアとヨセフ、また飼葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当て」て、人々にこの出来事の意味を知らせている。マリアは羊飼いの話を聞きながら、「これらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた」とある。

- ・マタイ福音書には、東方の博士たちの訪問を通して、ユダヤ人だけでなく世界の王の誕生としても描かれ（2・1～12）、マリアは博士たちにイエスを示している。

- ・マリアの名は出ないが、神学的にイエスの誕生として重要な箇所がパウロのガラテア書にある。「時が満ちると、神は、その御子を女から生まれたもの、律法の下に生まれた者としてお遣わしになりました」（4・4）とあり、イエスの人間性を強調している。そしてそれは「律法の支配下にある者を贖い出して、私たちを神の子となさるためでした」（4・5）と書いて、神の子となる新しい人類の時代を告げている。

ルカ福音書は、目立たないイエスの幼年時代のエピソードを二つ記している。

- ・神殿奉獻のうちに、シメオンによって逆らいのしるしとしてのイエスへの預言と、マリアの苦しみが語られている（2・22～35）。

- ・12歳のイエスを神殿で見失った話（2・41～51）では子を理解できず、すべてを心におさめているマリアの姿が描かれている。

## 公生活

・カナの婚礼：ヨハネ福音書は、共感福音書と全く違った姿でマリアを描いている。イエスの公生活の初めにカナで婚礼（2・1～12）があり、そこに招かれたイエスがマリアの願いによって水をぶどう酒に変えると言う出来事が出る。ここにはマリアの母親らしい細やかな心、とりなし手としての姿が描かれるが、マリアに応えるイエスの答えが「婦人よ」で始まり、読むものに驚きを与え、さまざまな解釈がなされている<sup>(6)</sup>。

しかし、マリアはそれに対し、「この人が何かいいつけたら、そのとおりにしてください」と、応えている。

・「私の母とは誰か」：マルコ福音書は、直接イエスの神の国の宣教で始まるが、公生活の途中でイエスと母に触れ、「私の母とは誰か、私の兄弟とは誰か」と、群集に問いかけ、「神の御心を行う人こそ、私の兄弟、姉妹、また母なのだ」（31～35、マタイ12・46～50、ルカ8・19～21は「神の言葉を聞いて行う人たちのことである」となっている）と言っている。

・また、イエスの教えを聞いて驚いたナザレの人たちが、「この人は、大工ではないか、マリアの息子……」（6・1～6、マタイ13・53～58、ルカ4・16～30）とあってイエスに躓いている。

・このような肉親としてのマリアへの発言はもう一つルカにあり、『なんと幸いなことでしょう、あなたを宿した胎、あなたが吸った乳房は。』しかし、イエスは言われた。『むしろ、幸いなのは神の言葉を聞き、それを守る人である。』（11・27,28）とある。

これらは一見、イエスの母マリアを否定しているように取れる。事実、母としてのマリアのあり方に否定的な解釈をする学者<sup>(7)</sup>もいるが、マリアをまさにイエスがほめる、「神の御心を行う人」「神の言葉を聞いて行う人」として、単なる肉親の母以上に、その精神においても

「幸せな人」として解釈する学者が多い<sup>(8)</sup>。

・「あなたの子です」「あなたの母です」：ヨハネ福音書は、公生活の最後にも十字架の下でのマリア（19・17～27）を描いている。そしてここでもイエスはマリアに「婦人よ」と呼びかけ、「これがあなたの子です。」そして、そばに立つ愛弟子に「見なさい。あなたの母です。」と言いつつ、全てを成し遂げて亡くなっている。

カナの婚礼と、この十字架の下での2箇所、イエスがマリアに「婦人よ」と呼びかける符合性から、ヨハネ福音書のマリアはイエスの母というより、イエスによって始められた神の国で、特別な使命を持った女性として描かれていると考えられる<sup>(9)</sup>。

・女が子を産むとき：マリアの名は出ないが、ヨハネ福音書に最後の晩餐説教の中で、イエスが、弟子たちの戸惑いに対して、喜びが苦しみに変わることをたとえて、「女は子供を生むとき、苦しむものだ。しかし、子どもが生まれると、一人の人間が世に生まれ出た喜びのために、もはやその苦痛を思い出さない」（16・21）と言っている。これは、十字架の死後3日目の主の復活による勝利をたとえているのであるが、他の誕生をも示唆しているように思える<sup>(10)</sup>。

### イエスの昇天後のマリア、初代教会の中で

・弟子と祈るマリア：使徒言行録の初めに、「彼らは皆、婦人たちやイエスの母マリア、またイエスの兄弟たちと心を合わせて熱心に祈っていた」（1・14）と、イエスを信じるものの共同体の中で共に祈るマリアの姿が描かれる。その後、ごく普通の弱い人間に過ぎなかった弟子たちの上に神の霊が降って、教会が誕生し、上からの力を与えられた弟子たちはイエスを証言していく。しかしこの描写を最後に、使徒言行録はマリアを初代教会の中で描いていない。マリアはどこにいったのであろうか、マリアの使命は終わったのであろうか。「マリアとは誰なのか」の



問いがここからも出る。

・女と竜：新約聖書の最後に、旧約聖書同様、さまざまなシンボル、数字を使って描かれるヨハネ黙示録がある。この中に身ごもった一人の婦人が登場する。その婦人の前に竜が立ちはだかり、生まれる子を食べようとしている。生まれた子は鉄の杖で全ての国民を治めるため玉座に引き上げられ、女は荒れ野に逃げ込んで神に守られる。この間に、天で戦いが行われ竜は大敗すると言う（12・1～18）。迫害下の教会が、イエスの誕生になぞられて書かれている<sup>(11)</sup>。

教会の中で大きな場を占めているマリアではあるが、聖書には新約聖書でもそれほど多く描かれてはいない。旧約聖書に預言的に少しずつ散見するものが、マリアの名によって具体的な人物として表れ、イエスの母と呼ばれているが、新約聖書でもその存在は、初めから謎めいたものがある。母として示されながら、また、否定されているような描写も現れるのである。その意味するところは、イエスの「私の母とは誰か」や「幸いな人」、また、「婦人よ」の呼びかけ、弟子たちと共に共同体で祈るマリアなどをみると、単にイエスの母ではなく、イエスを信じるものたちの母、また、新しいエルサレムとして、旧約と同じように、集合人格的なシンボルにもなっているといえる。

### 教会の歴史におけるマリア

福音書・使徒言行録に表れるマリアは「イエスの母」として登場している。しかし、ヨハネ福音書や黙示録の「婦人」は、単にイエスの母ではない。教会の歴史の中で、キリストの本質についての異端論争を通してキリスト論が教義決定<sup>(1)</sup>されるにつれて、キリストに生涯同伴したマリアのあり方も検討され、その称号はさまざまに発展変化している。以下、その最も大切なものを考察する。

## テオトコス Theotokos (神を生んだ方)

マリアが神の母であることは聖書のどこにも直接には書かれていない。マリアは単に人間イエスの母であるのに過ぎないのか。テオトコスはマリアの称号で、「オリゲネス以来用いられ、4世紀には神学でも一般民衆の間でも使われるようになった。」5世紀のネストリウスの「神の母の称号はマリアにふさわしくない」という意見に対応して「アレキサンドリアのキュリロス等が431年エフェゾ公会議でネストリウスを異端とし」、「テオトコス」の称号をマリアの称号として承認した。「その後、この語の成否は議論されることなく、西方教会でも承認され現在に至っている。キリストの受肉における神性と人生の結合というキリスト論とマリア崇敬とが結びついて生まれてきた称号であり、つねにキリストとの関係でマリアを捉えている」<sup>(2)</sup>。この称号は、教会分裂以前の公会議における教義決定であるため、ギリシャ正教、プロテスタントの諸教派も認めている<sup>(3)</sup>。

## 無原罪の御宿り

この形容詞は初代教会の初めからマリアに適用されていたが、的確な意味はもっていなかった。しかし、初めからマリアの聖性への確認は求められており、中世の長い論争を通して深められ、教義決定されていた。

1854年12月8日ピオ9世は「……人類の救い主キリスト・イエスの功績を考慮して、処女マリアは、全能の神の特別な恩恵と特典によって、その懐胎の最初の瞬間において、原罪のすべての汚れから、前もって保護されていた。この教義は神から啓示されたものであり、これをすべての信者は常に固く信じなければならない。」と教義宣言した<sup>(4)</sup>。

しかし、この教義は古代教会の頃からさまざまな意見もあり、正教諸教会、プロテスタントからはキリスト教の一致を阻害するものとし、承認されていない。正教は、マリアの罪のなさを認めてはいても、マ

リアが罪深い人類との連帯性の中にあるものとして、原罪を共に持つもの<sup>(5)</sup>として聖母の無原罪の御宿りを教義とすることに反対している。

ローマ・カトリックは、マリアの無原罪の御宿りの状態が、最初の間人アダムとエヴァの持っていた自然的に完全な義の状態と同じではなく、キリストのあがないによる恵みの状態としている。パウロ書簡にある「罪が増したところには、恵みはなおいっそう満ち溢れました」（ローマ5・20）からも人類をあがなう恵みによる義の状態で、はじめの人間の状態よりすぐれたものとしている<sup>(6)</sup>。天使のマリアへの挨拶「恵み満ち満てるマリア」は、ヨハネ福音書でキリストに使われている「恵みと真理とに満ちていた」（1・14）と同じで、いっそう優れた恵みの状態といえよう。

## 被昇天

聖書で人間の死は罪の罰として与えられている（創世記3・19）。罪を犯さなかったマリアが死の腐敗に留まることはない。「キリストの秘儀は十字架によって完了したのではなく、復活と昇天の栄光をもって完了した。マリアの秘儀も十字架の下で終わったのではなく、キリストの栄光に参与することによって完成される」<sup>(7)</sup>。19世紀の半ばからマリアの被昇天の教義宣言が請願され、第一バチカン公会議で教父たちからも提案されていた。神学者の研究成果、全司教からの意見を求めた後、1950年ピオ12世は「……無原罪の神の母、終生処女であるマリアがその地上の生活を終わった後、肉身と霊魂と共に天の栄光に上げられたことは、神によって啓示された真理であると宣言し、布告し、定義する。」と教義宣言している<sup>(8)</sup>。

ギリシャ正教は、被昇天の祝日を「マリアのお眠り」として祝い、死に定められた人間との連帯、また、これらの教義が、全キリスト教会による公会議で検討されたものではないとして、被昇天を教義として認めていない<sup>(9)</sup>。

## 第二バチカン公会議に見るマリア

第二バチカン公会議でマリア論は独立した憲章ではなく、『教会憲章』の最終章、第8章「キリストと教会の秘儀との中における神の母・処女聖マリアについて」で述べられている<sup>(10)</sup>。公会議は、「キリスト教生活を信者のうちに日々豊かなものにし、変更可能な諸制度を現代の必要によりよく順応させ、キリストを信じるすべての人の一致に寄与することすべてを促進し、また、すべての人を教会のふところに招き入れるために役立つ、すべてのことを強化しようと望む」<sup>(11)</sup>とし、新しい教義ではなく教会の今までの教義、伝承を現代にも分かるよう解釈して第8章を書き、マリアと教会のかかわりを深めている。この章は18条よりなり、五つの部分に分けられている。

### (1) 序

公会議は、まず、キリストの受肉の秘儀におけるマリアを語る。マリアを教会が敬うのはこの受肉の秘儀における功績であり、「教会の卓越した全く独特な成員として、さらに信仰と愛の点で教会の象型、最も輝かしい範型として」(53条)である、と、教会の立場を語っている。

### (2) 救いの歴史における聖なる処女の役割について

「旧約聖書と聖なる伝承は、救いの計画における救い主の母の役割を次第に明らかにし、あがないの主の母である一人の婦人の姿を、一步一步次第に明らかにしていく」(55条)。新約聖書ではこの婦人をマリアの名で、天使から「恵みあふれるもの」という挨拶を受け、「私は主のはしためです。お言葉の通りになりますように」と天の使いに答え、神の言葉に同意してイエスの母となり、イエスを育てた。公生活では「神の救済の意思を受諾し、子の下で、子と共に、全能の神の恩恵によって、あがないの秘儀に仕えるために主のはしためとして子とその働きに完全に自分をささげたのである」(56条)としている。また、イエスの昇天後

は、約束された霊が与えられるよう弟子たちと共に祈り、いかなる穢れにも染まらず日常生活を終えた後、天に上げられた（59条参照）としてマリアの役割を述べている。

### （3）処女マリアと教会について

「神の母は、信仰と愛とキリストとの完全な一致の領域において、教会の象型である」とし、マリアの内に教会のあるべき姿を読み取っている。「教会は正統に母とも処女とも呼ばれるがその教会の秘儀の中において、聖なるおとめマリアは、処女と母との卓越した独特な範型を示しつつ第一位を占めたのである。……マリアは子を産み、神はその子を多くの兄弟の長子とした。マリアは子の兄弟たちを産み育てるために母の愛を持って協力している。」（63条）教会はこのマリアに倣う（64条）。

そして、「この処女の一生は人々を再生のするために教会の使徒的使命に協力する人々が持つべき母性愛の模範」（65条）であるとしている。

### （4）教会における聖なる処女の崇敬について

マリアへの崇敬は、「特にエフェゾ公会議の時から尊敬と愛、祈りと模倣となって表れるようになった。それは『全ての世代の人々は、私を幸いなものと呼ぶでしょう』（ルカ1・45～55）という預言の通りである」、それは、「母がたたえられることによって、子が正しく知られ、愛され、たたえられ、その命令が守られるようにするのである」（66条）。それは、「真の信仰は神の母の卓越性を認めるようにわれわれを導き、われらの母を子どもとして愛し、母の徳を模倣するようにわれわれを励ます」（67条）からである。

### （5）旅する神の民にとって確実な希望と慰めのしるしであるマリア

マリアは、「しみもしわもない（エフェソ5・27参照）完成に既に到達しているが、信者はまだそれに努めている」（65条）。それゆえ、「旅

する神の民にとってマリアは確実な希望と慰めのしるし」(68条)であると結んでいる。

第二バチカン公会議の『教会憲章』におけるマリアについての考察は、カトリック教会ばかりでなく、ギリシャ正教、プロテスタント諸派においても好意的に受け取られ、かつて、教会一致の妨げとも言われたマリア論が、今、一致の推進役としても機能するようになった<sup>(12)</sup>。

ギリシャ正教側の「マリア論」は少ないが、ニコス・ニシオティス師の論文「東方教会の正教神学におけるマリア」がそれに言及している。「彼女の教会における母性がカリスマ的基礎の上にたつ教会統一へと呼びかけるだろう」として、教会の代表者たちが統一の源としてのマリアへの自覚を強めていることを述べている。そして、「ローマ・カトリック教会が第二バチカン公会議以降、純正なキリスト論的マリア論にもどる道を見だし、誇張した教義を避け、キリスト教的共同体との連帯性を、新たに確認しているように見える。これは東方教会の眼に勇気あることだと映っている」<sup>(13)</sup>と述懐している。

聖公会もローマ・カトリック教会との教会一致推進委員会での合意文書で、無原罪の御宿りと被昇天の教義はそれが聖書で充分裏付けられていると考えないとしながらも、マリアについて多くの合意を文書化している<sup>(14)</sup>。

教会の歴史においても、初めはマリアの個人的な特性が注目されているが、第二バチカン公会議ではそれらを総括して、終末に向かう教会とマリアのかかわりに焦点がおかれている。

## 典礼に見るマリア

### 祈りとマリア

マリアが教会の中で大きな場を占めるのは祈りの中である。ビザンチンの教会堂には多くのイコン<sup>(1)</sup>がある。イコンは天国への窓といわれ、中でもマリアイコンが圧倒的に多い。西洋でも教会には多くのマリア像があり、巡礼地も多い。「マリアへの信心が、……聖なる礼拝の全領域のなかできわめて崇高な位置を占めている……そこには、英知と宗教との最高の表現」<sup>(2)</sup>があるとパウロ6世は言う。そして、「各世紀のキリスト信者たちは、イエスの母にまつわる彼らの感情を表現するにあたって、自分たちが生きている時代を反映する方法や様式に従っており……世紀を異にするこれらのキリスト信者たちは、それぞれマリアとその使命を黙想しては、彼女を新しい女性、完全なキリスト者として仰ぎ、また一人の処女、妻、母としての身分を有する彼女のうちに女性としてのすぐれた鏡を発見した」<sup>(3)</sup>とも述べている。

確かに、人は祈るとき、知らない間にマリアの姿をとって神に向かう。その時、自分の姿も知り、自分を正すために「もし、マリアだったら」と聖書の場面を振り返って、祈りを深めていく。その意味で、マリアに関する聖書箇所は少ないが充分と言えるほど貴重である。

例えば、神のお告げ：それは新しい神の民であるキリスト教の始まり、新しい人類の始まりであった。それはまた、祈りとは何かをよく語っている。祈りの雰囲気の中にいるマリアの姿を観ると、驚き、戸惑い、問い、傾聴、応答がある。この応答には自分が誰であるかを知る謙遜、神と人類への愛、神への委ね、慎ましく、かつ堅固な協力への意志がある。神との対話のモデルがここにあるといえる。典礼・礼拝のモデル、人間の神の前で取るべき態度の模範をみることができる。「マリアは神との対話に臨んでは、積極的な、しかも責任を伴う同意を与えた……それはどうでもよいような問題を解決するためでなく、まさにみ言

葉の受肉と呼ばれている『全世界的な重要性をもつ出来事』に参加するためであった」<sup>(4)</sup>と、パウロ6世はマリアの祈りについて言及している。

そして、マリアの賛歌：マリアの心に溢れ出た神への賛美であり、この幸せを、「今より、世々の人は私を幸いなものという」（ルカ1・48）と預言している。そして、マリアが「神が謙遜な者や虐げられたものを擁護し、この世の強力な者をその恵まれた座からひきおろすお方であることをはばかりなく宣言している」<sup>(5)</sup>ことは、現代の女性にもちから強いものとして響くであろうと、述べている。

マリアからイエスへ：聖なるおとめに対するまことの信心においては、「母がたたえられることによって、子が正しく知られ、愛され、たたえられ、その命令が守られるようにするのである」（「教会憲章」66条）であると、第二バチカン公会議文書が言っているように、マリアへの祈りは「マリアを通してキリストへ」が正しいあり方といえよう。

さらに、「主の謙遜なはしために対する信心は、……キリストを信じるすべての人々の一致を妨げるものではなく、むしろ道となり、出会いの場となる」<sup>(6)</sup>。それは、「カナにおいて、聖なるおとめの仲介の結果としてキリストの最初の奇跡が行われたのと同様に、今日でも彼女の仲介は、キリストの弟子たちがまったく同じ信仰において一致する時をもたらすことができる」<sup>(7)</sup>と書いてある。今回のマリア巡礼で東西教会の一致の必要性を痛感したが、それが一日も早く実現するよう聖母の仲介を願いたいと切に思った。

### ビザンチンの教会堂におけるマリア

ビザンチン典礼で代表的なものは、その教会堂に見られるマリアである。ドームの頂上には昇天のキリストかパントクラトル（世界支配者としてのキリスト）が描かれている。聖体拝領台の上に出来たイコノスタシス（聖画壁）の王門には、通常、聖母へのお告げの場面（と4福音史家）がある。そして後陣の一番高い所にテオトコス（モザイク又はフ



レスコ画が見られる。

テオトコスの教義宣言を受けて、ビザンチンの教会堂ではモザイク、フレスコ等で、聖母が豊かに描かれて行く。今年のサバティカル・イヤーを利用してその一部を訪ねた。圧巻はかつてのコンスタンティノポリス総主教座聖堂、ハギヤ・ソフィア大聖堂の後陣に描かれたテオトコス<sup>(8)</sup>と、コーラ修道院の内拝廊にある聖母の生涯である。

ハギヤ・ソフィア大聖堂はギリシャ十字式大聖堂で、その中央の4本の柱の上にドームがのっている。東に半円の後陣が配され均整のある壮麗な教会堂である。この聖堂が建立されて以来<sup>(9)</sup>、この形式がビザンチンでは好まれ、バシリカ形式に変わってこのバリエーションが多く、の聖堂を生み出していった。残念なことに、1453年5月30日、イスラム寺院になったとき、多くのモザイクは漆喰で塗りつぶされてしまった(現在は博物館となっている)。

残された数少ないモザイクで、このテオトコスのモザイクは、他には観られない程少女に近い初々しいマリアが幼子イエスを膝にのせている。ハギヤ・ソフィア大聖堂が壮大なのでこの聖母子は4.87メートルもあるが、地上からはるか遠く、天上高く小さく見える。しかし存在感がある。祭壇に近づけば近づくほどよく見えてくるが、2階ギャラリーに上がり、祭壇に向かって右側から見ると間近にみえる。非常に美しく、荘厳である。これだけのものを今まで見たことがない。

プラケルネ地区の少し南に、5世紀コーラ修道院<sup>(10)</sup>が建てられた。その後、12世紀に現在の形になったと思われるが、現存するのは教会堂だけである。現在、コーラ美術館は世界遺産の一つに登録されており、USAのビザンチン研究所によってモザイクとフレスコ画が修復されている。ここに残るモザイクは見事であり、貴重な遺産であり、見るものを圧倒する。聖堂内は出口上にある「聖母のおねむり」をのぞいてほとんど残っていないが、特に外拝廊、内拝廊に残るキリストと聖母マ

リアの生涯を描いたモザイク、葬礼用礼拝堂のフレスコがイスタンブールに残るビザンチン美術の輝かしい残照といえる。

マリアの生涯がこの内拝廊にどこよりも豊かに描かれている。内拝廊には、1. 拒否されたヨアキムの祈願 2. ヨアキムと羊飼い 3. アンナへの吉報 4. 黄金の扉の前での抱擁 5. マリアの誕生 6. 初めて7歩あるいたマリア 7. 両親に慈しまれるマリア 8. マリアを神聖視する僧侶たち 9. 寺院に詣でるマリア 10. 天使の食物を受けるマリア 11. 毛糸玉をもらいうけるマリア 12. ゼカリアの祈り 13. マリアの夫に選ばれたヨセフ 14. マリアを家に連れて行くヨセフ 15. マリアを祝福する天使 16. マリアを残し旅に出るヨセフ、のモザイクがある。これに続くものが外拝廊のキリストの生涯である。これらはカテケシスのためにもちいられたものと思われ、壁、天井、柱のすべてに描かれている。

この中でも、「初めて7歩あるいたマリア」「両親に慈しまれるマリア」は初めてみたものであり、慈しみの中に育った聖母がその表現から推測され、非常に感銘を与えるものである。また、「マリアを神聖視する僧侶たち」「天使の食物を受けるマリア」「毛糸玉をもらいうけるマリア」等も初めてのものであり、神の母となるべく特別な存在としてのマリアを描いている。ここには、既にマリアへの信心、崇敬のありようがみえる。この修道院のモザイクで、聖母は極端なほど長身に描かれている。それが見る者に人間でありながら人間を超えたものとして聖母の存在を受け取らせるのに貢献しているように思われる。

これらにみられるテオトコス、ヴェニス、ラグーナにあるトレッチ島のカテドラル<sup>(11)</sup>に引き継がれ、その姿を見ることができる。しかし、それ以後のものはオスマン・トルコの侵入の危機感とイスラムへの脅威のため、聖母の表情が陰しくなっている。また、イスタンブールでは、8～9世紀の聖画像破壊論争で多くのイコンが破壊され、再興しているが、再び、イスラムによってほとんどが漆喰で塗りつぶされ、今では見る影もなくなっていた。しかし、今回訪れたブルガリヤには、共産

主義で痛めつけられたとはいえ、その多くが残っていた。ソフィアのアレキサンダー・ネフスキー大聖堂、聖ゲオルギウス教会では典礼が美しく歌われ、マリアの祝日が盛大に祝われている。

パウロ6世はビザンチン典礼の教会堂のマリアに、キリスト者の出発点と目指すべき頂点が描かれているという。キリスト教は聖母への天使のお告げと、それに応える謙遜なマリアの承諾に始まっている。キリストの生涯が模範として仰がれることは勿論だが、キリストに忠実に従った一人の慎ましやかなこの女性の姿を通して人間がたどる道が示されているといえる<sup>(12)</sup>。そこに見られる構成配分は見事で、統合性と志向性が感じられる。それに比べると、西洋のマリア像は雑多におかれ、まとまりがない。私も今回ビザンチンの教会堂を見た後のせいも、無秩序に飾られている御像はいらないと思うほどであった。これをルネ・ヴォアイヨームは次のように言っている。「東方教会の偉大な点の一つは、壁を覆う聖図が、すばらしい神学的まとまりを見せていることで、そこに遠近法による誤謬が全く存在しないことです。救世主は必ず右側にあり、聖母は左側、そして聖人たちは他の段階に属しているというわけです」<sup>(13)</sup>。そして、「シチリアのパレルモの町の背後の丘にあるビザンチン様式の、モンレアルの聖堂に行ってください。……壁画の中の秩序をよく分析してください。全くすばらしいものです。……聖母は地上の教会の柱ではありません。……マリアは中央御子の下に、キリストよりは小さく、キリストの次にくるマリアだけの高み、マリアだけが属する高みにあります」<sup>(14)</sup>と、巡礼を勧めている。

## おわりに

今回、ビザンチンのテオトコスのごく一部を訪ね、聖母を尋ねていく内に学び考えさせられることが多く、マリアについての本を読み返していった。そんな中で、たまたま出会った本に『マリアとは誰だったの

か』という本があった。行きづまっていた「マリア論」について揺さぶるような論文に出会い、改めて、マリアを研究し直した。それは『教会憲章』8章にみられるマリアをもう一度読み直すことであった。

この論文を執筆しながら思い出したのが修士論文である。『パウロ書簡における「キリストの体」としての教会概念』<sup>(1)</sup>が私の修士論文のテーマであった。『教会憲章』「第一章教会の秘儀について」の6が(教会の象)となつて、教会を様々なものに譬えている。その後の7は(キリストの神秘体である教会)が詳述されて、教会の生命がやはりたとえの下に描かれている。私はここから論文のテーマを取っている。

この中で、「頭、体、充満」<sup>(2)</sup>という概念が重要になるが、どうしても充満について書ききることができず、神秘体としての体と頭のみになっていた。何時の日か充満についても書き、教会概念を明確にしたいと思っていた。

私の中では教会というと「母なる教会」の概念が強くあった。そのことを、「マリア年」に、私にとって聖母と教会は切り離しえない存在として『カトリック新聞』<sup>(3)</sup>に書いたことがる。既に、その時から、教会の充満をマリアの中にも見るようになっていた。

パウロが教会論の大テキストであるエフェソ人への手紙に、「教会はキリストの体であり、すべてにおいてすべてを満たしている方の満ちておられる場です」(1・23)、と書いている。しかし、現実の教会にそれを観るには相当の信仰が要求される。それを第二バチカン公会議は、教会の母としてマリアを考察し、教会とマリアを切り離しえないものとして描くことによって、「教会は聖なる処女において、しみもしわもない(エフェゾ5・27)完成にすでに到達しているが、信者はまだそれに努めている。」(65条)としている。

マリアはイエスの母であり、特別に選ばれ、あがなわれた方であった。しかし同時に、イエスの遺言によって、イエスを信じるものの母でもある。本論文で振り返った聖書、聖なる伝承のどれを通して、マリアはいつも一人の選ばれた人物であると共に、集合人格的な神の民・

教会をも指していた。教会の使命は、神の言葉を聞き、それを深め、内面化して神の子を産み（洗礼）、育て、世に与えていくことである。まさに、マリアのそれと同じである。1964年11月21日、くしくも聖母の奉献を記念する日に、公会議はこの『教会憲章』を承認している。それを承認するに当って、パウロ6世はマリアに「教会の母」の称号を捧げ、終末に向かうマリア信心を方向付けている<sup>(4)</sup>。

第二バチカン公会議後、ローマ・カトリックで、マリア信心が低下した<sup>(5)</sup>のに比べ、キリスト教諸教派でのマリア論が再興している。『コンキリウム』誌の「マリア特集」はそれらを集めたものであり、それを再編集して書籍化したものが『マリアとは誰だったのか』である。その中に「テオトコスは、神がキリストにおける新しい人間人格とその教会の創造を目指して戦う人類に与える中心的形姿であり原像である」というすぐれた記事があった<sup>(6)</sup>。

「マリアとは誰か」、長年議論されてきたことではあるが、マリアが2000年にわたって教会の中でもっていた精神はやはり侮れないものがあるといえる。それは、マリアがまさに、神において、私たち一人一人が、教会が、あるべき姿なのだからである。その意味で、道しるべであるともいえよう。一人一人がマリアを深めることによってキリストを知るすぐれた方法を生きる時、教会はその輝き、本来の姿を表していくのであろう<sup>(7)</sup>。

第二バチカン公会議は、その『教会憲章』の最終章に、わずか18条の論述で、キリスト論、聖霊論、教会論とのかかわりで、バランスあるマリア論を展開し、キリスト教2000年の歴史を見事にまとめている。改めて第二バチカン公会議の偉大さと、それをほとんどこなしていない現実を痛感した研究であった。

## 注

### はじめに

- (1) パウロ 6 世『マリアリス・クルトゥス』中央出版社、1976・6・10 (2刷)、p.72

### 聖書に見るマリア

- (1) フランシスコ会訳『聖書 原文校訂による口語訳 創世記』中央出版社、p.43、(8)
- (2) 『新カトリック大事典Ⅱ』研究社、1998・1、pp.1150～1151 参照。
- (3) 高柳俊一編『神の福音に答える民』LITON、1994・11・25、p.162
- (4) 『マリア論入門』(中央出版社、1971・9・21) を著したアントニオ・エバンヘリスタ師による「マリア論」の講義。
- (5) 前掲書『マリアリス・クルトゥス』p.27
- (6) フランシスコ会訳『聖書 原文校訂による口語訳 ヨハネ福音書』中央出版社、p.43、(4)
- (7) 前島誠『ナザレ派のイエス』春秋社、2001・6・25、pp.104～108 「家族との関わり」他参照。
- (8) フランシスコ会訳『聖書 原文校訂による口語訳 マルコ福音書』中央出版社、p.45、(15)
- (9) 前掲書『聖書 原文校訂による口語訳 ヨハネ福音書』p.197、(16)
- (10) 『ヨハネ黙示録』12 章の「女と竜」参照。
- (11) フランシスコ会訳『聖書 原文校訂による口語訳 ヨハネ黙示録』中央出版社、1972・3・20、pp.83～87、(1～16) 参照。

### 教会の歴史におけるマリア

- (1) H・イェディン『公会議史』南窓社、1986・3・31、pp.26～28、ニカイヤ信教をめぐる論争、pp.37～38、カルケドンの信

教参照。

- (2) 『新カトリック大事典Ⅲ』 研究社、2002・8、pp.1139～1140。  
なお、前掲書『公会議史』 pp.32～37、及び、『キリスト教史②  
教父時代』 講談社、1981・2・25、pp.222～228 には、テオトコ  
スに反対したネストリウスの破門と、この間の事情が書かれてい  
る。
- (3) 前掲書『マリアリス・クルトゥス』 p.82、前掲書『マリア論入  
門』 p.204、及び、E・モルトマン、H・キュング、他編『マリ  
アとは誰だったのか』 新教出版社、1993・5・25、pp.145～146  
等、参照。
- (4) デンツィンガー、シェーンメツァー『カトリック教会文書資料  
集』 エンデルレ書店、1974・9・30、p.429、D 2803、なお、D  
2800～2804 も参照。
- (5) 前掲書『マリアとは誰だったのか』 p.158 参照。
- (6) 前掲書『マリア論入門』 p.284 参照。
- (7) 前掲書『マリア論入門』 p.350。
- (8) 前掲書『カトリック教会文書資料集』、D 3903。宣言発布前後の  
状況はD 3900～3904 参照。
- (9) 前掲書『マリアとは誰だったのか』 p.162 参照。
- (10) 南山大学監修『公会議解説叢書3－自覚を深める教会』 中央出版  
社、1969・1・20、pp.564～、「第8章成立の経緯」参照。
- (11) 南山大学監修『第二バチカン公会議公文書全集』 サンパウロ、  
2001・7・1「典礼憲章」 p.7、(1)。
- (12) 前掲書『マリアとは誰だったのか』 p.169
- (13) 前掲書『マリアとは誰だったのか』 pp.169～170
- (14) The Anglican・Roman Catholic International Commission  
(ARCIC) “*The Seattle Statement Mary: Grace and Hope in  
Christ*” Seattle, Feast of Presentation, February 2, 2004。教皇  
庁キリスト教一致推進評議会、聖公会・ローマカトリック国際委

員会作成、シアトル合意文書『マリアーキリストにおける恵みと希望』2004・2・2（高柳俊一暫定訳）参照。

### 典礼にみるマリア

- (1) 南川三治朗『イコン（聖画像）の道—ビザンチンの残照を追って—』河出書房新社、1997・1・10。構想から20年を費やして出版されたすばらしい写真・文集である。東方正教会を網羅しての著者渾身の業績であり、今回のビザンチン典礼巡礼もこの本に啓発されたものが多いと言える
- (2) 前掲書『マリアリス・クルトゥス』p.9、序文
- (3) 前掲書『マリアリス・クルトゥス』p.89
- (4) 前掲書『マリアリス・クルトゥス』p.91
- (5) 前掲書『マリアリス・クルトゥス』p.92
- (6) 前掲書『マリアリス・クルトゥス』p.84
- (7) 前掲書『マリアリス・クルトゥス』p.85
- (8) これについては飯田助教教授のホーム・ページ冒頭がその動画像であるのでぜひ見てほしい。
- (9) この大聖堂建立の歴史については、浅野和生『イスタンブールの大聖堂』中公新書、2003・2・25に詳しい。
- (10) Ilhan Akşit “The Museum of Chora Mosaics and Frescoes” Akşit Kültür Turizm Sanat Ajans Ltd.Şti. 1<sup>st</sup> édition, 2002 参照。
- (11) トレッチ島はヴェニス人のラグーナにある小さな島で、聖マルコ大聖堂に先立つこと200年に、このラグーナではじめに司教座聖堂が建てられたところである。いまは寂れ、小さな港で降りると一本道でカテドラルに着く。他にはこれというものが何も残っていない。
- (12) 前掲書『マリアリス・クルトゥス』p.73
- (13) P.René Voillaume 'La Vierge' (“Masses ourières. féories”, 1954)、ルネ・ヴォアイヨーム、須賀敦子訳『聖母』p.54



(14) 同 pp.55 ~ 56

おわりに

- (1) 拙著、上智大学大学院研究科修士論文『パウロ書簡における「キリストの体」としての教会概念』1973・1・31。
- (2) Benoit, P. 'Corps, Tête et Plérôme dans les épîtres de la captivité' "Revue Biblique" vol.63 (1956) 参照。
- (3) 『カトリック新聞』1988・1・17、6面「私にとっての聖母—なぜ……と問わずに歩む人生の道しるべ」
- (4) 前掲書『公会議解説叢書3—自覚を深める教会』pp.604 ~ 609 第二バチカン公会議第3会期閉会時のパウロ6世の言葉参照。
- (5) 本論文で多用したパウロ6世の使徒的勧告『マリヤリス・クルトゥス』は、第二バチカン公会議後10年経った時、カトリック教会におけるマリヤ信心の状況から公布されている。
- (6) 前掲書『マリヤとは誰だったのか』pp.167 ~ 178
- (7) J.E. ビフェト『新しい時代の聖母』女子パウロ会、1981・5・15、pp.16 ~ 17、56 他。ビフェト師からも3ヶ月間、「マリヤ論」をレジナ・ムンディで聴講することができた。この本は師の「マリヤ論」を非常によくまとめている。『教会憲章』と『マリヤリス・クルトゥス』の解説で、マリヤを「受諾のマリヤ」として書かれており、参考になった。

なお、聖書の引用は、書物からの引用文を別として、『聖書 新共同訳 旧約聖書続編つき』日本聖書協会、1987 を使用した。